

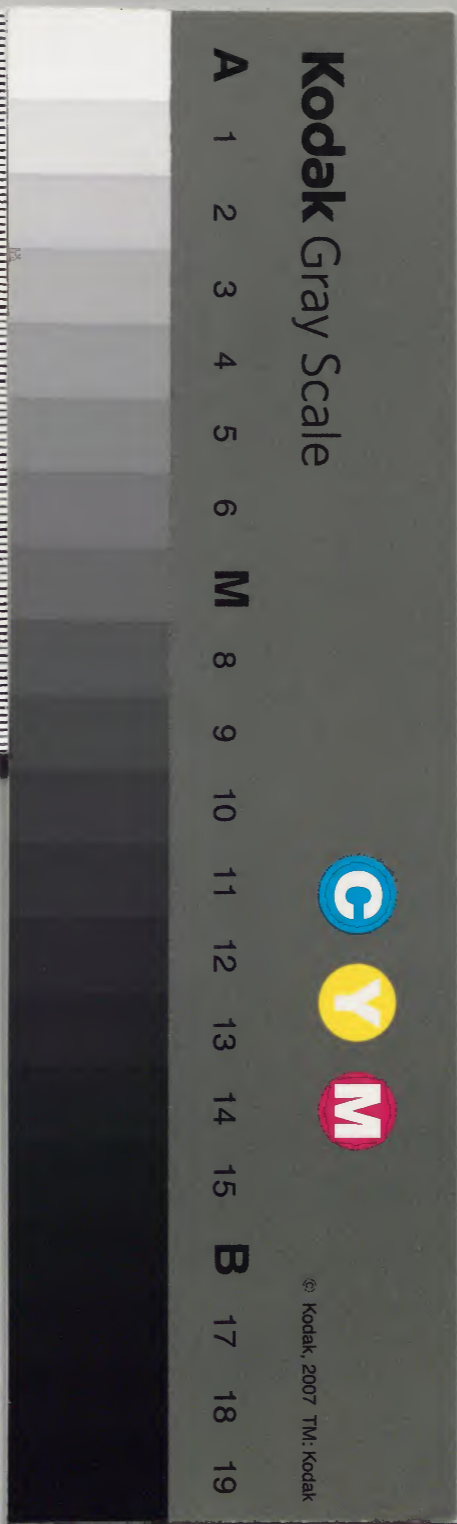
日本書紀傳 十五卷六

和書
一〇五二二號

四十

内閣文庫	
番號	和 10522
冊數	156 (49)
函號	特 85 1

日本書紀傳



古印

早稲子孫付十二、六 田川元範
好むを在るに

十五、六
五倍を在るに 大島長徳

文部省
蔵印

圖書
蔵印

古印
蔵印

南一三六八三號

見れ 儲右の野城神社ハ天穗日命ハ御在りて大穴持
神大穴持御子神ト共ニ鎮坐するなり風土記ハ野城驛
郡家正東二十里八十歩依野城大神坐故云野城ト有
り此ハ能義郡ト云ふ郡名の起れる本ふるを以て思
ふハ右ニ註る天穗日命神社ハ本より式外ト有
りハ官帳ニ被載ると雖も其別社トて本社ハ右ニ謂
ゆる野城神社是なり其を天穗日命ト定云ふ所由ハ
傳十五丁ニ小註せし倭姫命世記ハ出雲神子出雲建子
命一名能都彦神一名掃玉命ト有る出雲臣譜ト依て
考ふる武夷島命其子伊佐我命其子津狡命其子掃鹿

日本書紀傳十五
〇二百四十六

前命ハ右の掃玉命めて伊勢國邊を主領き居たり
故に伊勢津彦命とハ云一あり其住居たる多賀佐山
ハ高倉山の事にて和名抄郷名ハ伊勢國度會郡奴木
木と有も出雲の地名を移せらふしとも伊勢津彦命
を豈野城大神と云むや大神と申すハ其遠祖天穗日
命ヲ御在ー坐テ故ふる事心を平らふして考ふ可し
猶出雲國意宇郡野白神社有り風土記ハ野代と作る
を皇太神宮儀式帳ハ御近幸の所ハ粟名野代宮有り
又出雲郡伊佐波神社有り志摩國答志郡粟島坐伊射
波神社ニ座並大と有ハ武夷鳥命の子 伊佐我命
不とふも右の如く出雲國と伊勢國と其名の相通
へるふとも天穗日命の子孫ふるを以て其本末を明
くし可き ○又神名式ハ近江國蒲生郡馬見岡神社ニ
者あり

座ハ式文の御撰有ー時ハ菅家の甚く衰給へる時不
り一が故ハ小社の列めて御在ー坐せども出雲より
移奉りて甚々尊き御社ハ不む有ける其社記ハ載る
四月御祭宣文ハ參集神主祝部ハ祢男女等諸聞食止
宣以下訓高天原 仁 神留座 須 吾親加夫呂岐加夫呂美 乃
命 持天 吾皇御孫尊波大倭國 平安國登 所知食 氏天
津神國津神 祭給 幣時 仁 天穗日命 能 和御魂 八咫
乃鏡 仁 取託 八重柳葉 仁 取懸 天 出雲 乃國 與 彦健 忍雄
心命 此國 仁 到給 比 川 楨田 乃 邑 仁 志 國造 乃 新 尔 造 奉
禮 御室 仁 天 乃 小 菅 平 可敷 天 乃 八十 冠 平 獻 利次 乃 日

村人導^奉奉利志奴^乃谷川^乎沂利天翔奇日^乃嶽仁齋
比奉利國^乃真保良^止崇奉^利奧山^乃雲井^尔遠畿高山
波春秋^乃祭毛意^仁任^世物止其後^仁卜定^志親^仁饋留
昨野邊^乃甘美^加罔^乃上^仁宮柱太敷立^天高天原^仁千
水高知^天奇日^乃嶽^仁座天穗日命西宮^尔座天夷鳥命
推殖^仁座健御熊大人命^止三柱^乃神^乃御名^乎和^天常
磐^仁堅磐^仁齋^比奉利吾皇御孫尊^乃乎長幾御世^乎伊
加志御世^登言壽奉利天下^乃公民^乃作留作^利物^乎惡
風洪水^仁遇^世給^受成^章開^奉良^年故^仁今年^乃四月^乃
中^乃灾^乃日^乃朝日^乃豐京登^利故事^乎追^比尋^利川^振

田^乃邑^乃倉鴈^加小野^仁伊提^麻佐^志三柱^乃神^尔蒲生直
乃遠祖於保加夜都^比古命^乎相副^天四柱^乃神^乃御前
仁竹玉貫岳^乃腹滿^雙天^陪雜^乃色物^乎備奉^利肉事
物榛折伏^世字事物頭根高拔^天神主外後五位下出雲
宿祢負範^祝詞^新時^等加^恐美^畏申^世事^乃由^乎諸^共
仁狹牡鹿^乃御耳^乎振立^天平^計安^良計^久所聞^食止^宣祝
新^之所見^{たる}此^ハ祈年祭詞^之聞^えたる^ガ此^神社^の
大略如此^者あり^此詞^甚古^くして^中昔^の人^{あり}ど^の
出雲宿祢^の遠祖^{より}以来^世に^傳は^れる^{あり}可^し
二月祈年祭^の朝廷^{より}頒^せ給^ふ官幣^を奉^り其^詞を
申^す右^の如^く人^子宣^と神^に申^すとの^差異^を立^て
宣^も申^しも^為る^事あり^其ハ^已に^祈年^祭詞^講義^{あり}云

たり 詞小皇御孫尊 波大倭國 平安國 登所知食 天津
神國津神 祭給 時 仁云こハ 社記小馬見國神社ハ
綿向嶽絶頂ト立せ給 古記ハ奇日嶺神社ト有り
二十一年目ト造替す祭神一座天穗日命當社ハ神武
天皇四海を一統坐て神祇の恩ヲ酬へむとて即位四
年皇天を祀り次ハ山川を祭給へる時此所ハ天穗日
命の遺跡あり由て神靈を出雲國より迎奉り此山
小配一祭れどもと云々云り其山を奇日嶺と云ハ此神
名を以て呼ぶ給よて天穗日命の亦名熊野椽樟日命
と申す縁あり又天穗日命乃和御魂 八咫乃鏡 取

託八重柳葉 仁取懸 天出雲 乃國 與云こト有レハ出雲
國 小本宮より其分御魂を遷し奉りレあり其社ハ
何れ有む上少云る意宇郡野城神社ト在ベキ事申
すも更あり御事あり 神賀詞ト乃大穴持命乃申給久
巳命和魂 八咫鏡 取託 天倭大物主柳彥玉命 登名
年 稱 天 大 御 和 乃 神 奈 備 尔 坐 与 有 其 古 式 被 用 凡
見レ者 彦健忍雄心 命ハ其神主 出雲宿禰の遠祖ト所
見たり其ハ同記小末社 檮畔神社の事を記して一名
飯室明神所祭三座彦健忍雄心命健甞宿禰後四位下
出雲宿禰負尚少て中央神ハ綿向大明神を出雲國ト
り供奉せしレたり御神あり左右ハ子孫トて綿向往

古の大神主たり一由云り其時世を神武天皇大御代
之云へば天穗日命を去る事遠うざらう人ありけり
健甞宿祢を江州錦向社記と云物ハハ甞宿祢と有り
名義抄ハ甞下諫反脛と註されたるハハハ甞ハ波岐
と訓べき字にて有けり其奇日嶺を錦向嶽と云事ハ
社記ハ別名朝日山錦面山釜底山と云ひ又此山を大
嵩と称し彦神山を小嵩と称せるを安元年中舊記御
穿鑿の時錦向の字シキ有が為小錦向と読せしハ錦山
大神の号を賜はれるハ就て勅号と准しハ錦白山と
名を改む又錦の御山ふと云ふと有が如し
此事を又
安元二年

丙申三月十六日帝王御祈の事有て錦山大神の勅額
并雲鳥の綾の斗帳一條勅附有り此時神主出雲負吉
を召され舊記御穿鑿有つるハシキ有て錦面山の字を
錦白山と読せしハ錦山大神の四大字御震翰成下
れき云々其後ハ後醍醐天皇の御宇吉野殿ナリ神主
出雲負尚を大宮司ハ成され後四位下ハ叙せしハ
其子播磨權守貞冬の時ハ將軍義満より改易せ
しハ其家亡ぬ由云々ハ可惜神胤を彼奸賊が年子
失ひたる者よて其罪去り所無天翔奇日乃嶽ハ齋比
く甚も思しハ大枉事ハハ天翔奇日乃嶽ハ齋比
奉利國乃眞保良止崇奉利ハ天翔ハ来と係て奇日と
云む發語あり木工權頭紀朝臣貫之主の誌されたる
天慶八年梁簡銘ハ大嵩社者天穗日命神世之古趾也
云々云これたると神賀詞ハ天穗比命ハ國體見ハ遣
時ハ天能八重雲ハ押別氏天翔國翔氏天下ハ見廻氏

合言事記天津日子
根命者浦正郎指す
之祖也見え又

返事申給久之有子由有けふる事あり此下子引る欽
明天皇六年の御託言も吾ハ此山の神天穗日命是
あり此國天上子侍りけり時子此地ハ吾棲息の處
あり云こと宣へる中子此國天上子侍りけり時とハ
此近江國のあり天上子天安河有り然る近江ふ安
川と云有り神名も天津彦根命御在坐を近江子彦
根と云ふ地名有ふを思へハ天香山の如くして降
下れる處もむも知べうず此を以て貫之主の大
嵩社者天穗日命神世之古趾也とい云れつる者と所
見たり 猶五男三女神子由有と所思しき事ハ神名式
小野洲郡御上神社名神大月次新嘗と有ハ

近淡海之御上祝以伊都玖天之御影神と見え其神
ハ天津日子根命の御子あり南生郡菅田神社有り姓
氏録山城國神別子菅田菅田久斯麻比止都命之後也
と有る右子同ト又通證引る樹下山門神系圖子活
津彦根命者近江國彦根明神也と云ひ又蒲生郡大嶋
神社奥津嶋神社名神大も共小宗像三女神子御在
坐あり思合せて其若て其奇日乃嶽仁齋比奉利と
然る所以を曉る可し
云ハ上文子依り實子神武天皇の大御世子も有へ
然れども宮居ふとハ未非りけりや奇日嶽神社正
遷宮宣文小奇日仁 猶辞竟奉皇神乃前仁白久掛麻久
畏 後乃志貴島ハ大八島國知之天皇命乃大命 平加
夫利皇神乃乞乃波之隨仁奇日乃嶺乃荒木草乃根列
掃比下津岩根仁踏凝之宮柱太敷立天天乃御蔭日乃

日本書紀傳十五

〇二百五十一

御蔭止定奉利天乃禮奈國乃禮奈齋比祀利奉礼流
故幾典仁隨天比廿年仁一太比大宮新仁造奉天平草菅
岳葛目結比堅米高天原仁千木高知比伊都乃年志呂
止刈敷苗天乃小菅平避伎掃比御酒波醴乃閑高知醴
乃腹滿雙陪御膳波海山乃物採利供陪御服神財仁至
万賢木乃技仁取懸天横山乃如久置足波之神主神祇
官疏属出雲宿祢榜悞祝詞称時等加被志齋波利申世
天津祝詞乃太祝詞乃事平平久安良久聞食比吾皇御
孫尊乃所知食須磯隱蒲生乃國平登古之陪仁見霽加
座天客國止静米麻母良比奉利給陪宣祝詞命平神主

祝部等諸聞食止宣右神祇官宣神部倣常例宣之有
り又社傳子欽明^{天皇}六年夏四月蒲生稻置三摩侶此山麓
子猶一けろ子時移るる獲無りけろを不審り思け
る所子天遽子曇り寒風凜々起り白雲^雪紛々降来
りて己子歸路を失ふ時子西大路の人山部連羽咋峯
巖時ふくす雪の白妙ふくを奇く至りて三摩侶子
逢ふ三摩侶云この由を語る其時天漸く晴れ猪鹿の
蹤有り依て此を慕登る子神入現形坐中告て曰く
吾ハ此山の神天穗日命^是なり此國天上小侍りけり時
此地ハ吾棲息の處なり故小神日本磐余彦天皇閑國

の四年大山小山の祀を定給ひ吾和魂を八咫鏡子取
託け拵技子取懸て出雲國より此處子迎奉り此山小
祝祭りて永る子國の眞秀マホラと成あき其後代この天皇
西羗を一王化子服せしめむと多く都を西偏子移
し有司の往来自然子疎略ハ成ハなるより幾星霜を
經禮典已ハ滅びむハす御等互ハく天朝ハ奏ハて舊
儀子復さしめよと云終て光物と化し山上子飛去給
ふ兩人奇異の思を成し直ちハ帝闕ハ奏ハ依て一山
を封して神地とし山上ハ神祠を造立し便宣命使を
下さる云しと云る此時の事ハあむ有ける梁簡銘ハ

欽明天皇御宇六年觀瑞以創祠於錦嶽と有る是あり
故思ふハ右の正遷宮宣文ハ已く欽明天皇御世ハと
小出来ハるハ有べし詞ハも古く又雅びて聞ゆ祝詞ハ
廿年仁一太比大宮新仁造奉天ハ遷奉太神宮詞ハ常
乃例尔依氏廿年ハ一過比大宮新仕奉氏ハ有り臨時
祭式ハ攝津國住吉下總國香取常陸國鹿島等神社正
殿廿年一度改作ハ有ハ如く決りて重き神社ハ限れ
る御會新 奥山 乃 雲井 仁 遠 嶺 高山 波 春秋 乃 祭 毛 意 仁
乃上 仁 宮 柱 太 敷 立 天 云 八 梁 簡 銘 天 武 天 皇 白 鳳
甲申仰德更作時於篠谷而奠儀竟備矣と有る是あり
社記ハ奇日嶽谷深く峯聳へ歳時の祭祀不便ハ依て
天武天皇白鳳十三年大辨官羽田公矣國執奏ハて日

右の羽田公天國云
天武天皇御紀云
十甲寅朔内宮遷
諸王五位伊勢王大御
羽田公八國云等
天行限分諸國之度
然其年不遷限分
云云其度在事
あり可

天智天皇九年御紀云
天皇御紀云
野而觀宮地と有
連野を比母奴と訓
今の日野町と其社
所在を云ふり傳
卷三百八十四云云

野の御牧馬見ヶ岡厩上の地は勸請成し奉り其後担
武天皇延暦十五年御遷座の沙汰有けるハ神慮を伺
奉れるハ宮中より綿を譬が如くふる一片の白雲東
を向て飛去り同ト所猪部の社の古櫻樹ハ懸り止ま
れ多小就て社を建て近奉る今の社地是ありと云り
但綿を譬と云ハ雲の形容ハ有へけれとも強たり
心ちす雄略天皇御紀ハ近江來田綿政屋野と云地名
も有るハ綿ハ地名ありけむも知べりす右の親仁
邊乃甘美加岡と続けたるハ親ハ讀多昨ハ甘美と続
くろあり昨ハ穀梁傳ハ宗廟祭肉生日服熟日膳と有
る服又膳ハ同音日乃嶽仁座天穗日命西宮仁座天夷
トキ者あり

鳥命推殖仁座健御熊野大人命三柱乃神乃御名并稱
天云ハ社記ハ祭神三座天穗日命天夷鳥命二座ハ
式存武三熊野大人命一座式外但延喜式撰定の頃ハ
菅家沈論の間少て天平神帳の任ハ社ハ列し置と
有ハ如くふる可し西宮ハ社記ハ祭神一座天夷鳥命
天穗日命元子勸請年紀未詳天平十一己卯年四月十
七日里人乙部末緒蒙託宣社再興有り延長六戊子年
二月奉授馬見國大嵩神正五位下同西宮神位五位下
之有り推殖ハ社記ハ推殖神社祭神一座武三熊大人
命天穗日命次子此御社ハ飯室明神彦健忌出雲國よ

り綿向大明神を供奉し給ひ始て止住給へる時其御
 祖神多々故に御祭有り舊跡に依て欽明天皇六乙丑
 年御社勸請の由相傳ふと云り但天夷鳥命武三熊大
 人命を元子次子と云事如何有む其定のハ天孫降臨
 章に就て云べし又其下子蒲生直乃遠祖於保加夜都
 比古命と云ハ其始に國造乃新仁造奉禮御室云々
 と有る國造は御在して彦健忍雄心命の出雲國より
 送到りるを於保加夜都比古命ハ其蒲生國造より有
 して迎取て共祀祭しれし可し右に載る正
 遷宮宣文に磯隱蒲生乃國之有を以て知べく又其名

も雄略天皇御紀來田綿政屋野小因此る事を明しむ
 可き者なり天穗日命天津彦根命ハ御兄弟に在せば
 右の彦健忍雄心命於保加夜都比古命共し世ハ隔れ
 ども叔姪の御間に坐せば然も有ぬ可き御事と伺
 奉る者あり右の加夜都比古神社も右に云る櫻野
 と云り江州綿向神社記と云ふ倉鷲ヶ小野口宮加夜都
 彦命又有れば口宮と申すよこ若て上小川振田乃
 邑仁志天國造乃新仁造奉禮御室仁云々有ハ始
 て出雲より到着給へる地にて國造於保加夜都比古
 命の弟宅の地と見ゆ然して此に故事乎遠比尋祐天
 川振田乃邑乃倉鷲加小野仁伊提麻佐志米とハ四月
 中災日神幸成し奉る小野始て御室を建て勸請奉
 りたり故事に奉る其倉鷲ヶ小野に令幸め奉る
 あり三柱乃神仁蒲生直乃遠祖於保加夜都比古命乎
 相副天四柱乃神乃御前仁云々云るハ右の倉鷲ヶ

日本書紀傳十五

〇二百五十五

此終云云は佐御前
の事とも合せ考ふ
可一其は同分の神
にて御在し坐り

小野あり口宮小令行幸めて神事を行ふ事ハ其始て
出雲國より迎奉て祭初たりハ其加夜都比古命子
坐故子其宮所子令又染簡銘小大高社者天穗日命神
坐奉りり云あり又染簡銘小大高社者天穗日命神
世之古趾也於是欽明天皇御宇六年觀瑞以創祠於錦
嶽其後天武天皇白鳳甲申仰德更作時於篠谷而奠儀
竟備矣雖然赤烏早翔兮春雨點其瑤玄兔速過兮秋露
疵其瑤清宮既廢矣故今復上棟立柱以全其佳蹟因以
祝奠明謨朗融四裔定焉良弼協和八荒安焉四時序季
疾病除焉十雨順節穀梁登焉俯念神明獻聖尚岳皇慈
矣敬白天慶八年己巳八月二日從四位下行木工權頭
紀朝臣貫之謹誌神主正六位上出雲宿禰主工匠無

位鞍部稻足と有り如此く朝廷より宮居を作進らせ
給へるを以ても大凡天下子天穗日命を祀奉りし神
社ハ此子超て高く貴きハ御在し坐ざりを式文の御
撰ハ管家沈淪の時とハ云ふが名神大社の列子九
小加りてせ給ハざらふむ憤わろしき事ありけり古
語拾遺云至天平年中勅造神帳中臣專權任意取捨有
由者小祀皆列無縁者大社猶廢敷奏施行當時獨步諸
社封稅惣入一門と有る如き事の為り有ぬ可き備
大宮ハ天穗日命西宮ハ天夷鳥命稚殖ハ武三熊大人
命エゴ撰畔ハ彦健忍雄心命健甞者祢從四位下出雲宿禰

武華傳三三卷三
二十番生稻寸の事
み合せ説すは見へ

貞尚主以上三神口言ハ加夜都比古命必佐御前ハ神
名式の比都佐神社にて社記ヲ祭神三座天津彦根命
山津照命日巢旬比咩命三神と有て右の六社を往時
ハ六所明神と申せりと云り此もて其名高ウリ
御事ハ知らるゝあり右の必佐御前の本祠ハ一座別
有「其後必佐郷駒調山ハ駒調山を駒調の山嵩とも又
山を宝殿 嶽とも云ひ駒調山を駒調の山嵩とも又
御山とも云ふ候 永年中氏子離散ハ牛ガ背山
小移せりを荒廢ハ依て御形代を必佐郷十禪師村
移「奉る神主北西氏ハ春原姓あり云々云り諸其
馬見園神社ハ綿向大宮と称して日野村并町仁正寺
境ニ在り神境四町八畝十歩産子九郷但六郷編戸五
間三十二戸の家彼高五千九百九十石の田役修理難務備
費勤社之と有り西宮ハ在西宮町除地九反歩推殖神
社ハ上野田村領にて大谷村領の中ニ在り除地廿四

ハ此无邪志國造
下幸房三一書天
穂日命此出雲臣武
藏國造土師建等
遠祖也ト有る其因
子彼記ト出たる限
を説す可一若

安壇畔神社ハ上野田村ニ在り除地一反三畝廿三歩
加夜都比古神社も同村ニ在り除地廿四歩有と云て
甚トく京給へり右の廿一年目子造替の事ハ今ハ
怠せざり由ありハ神威の殊ニ尊く御在り坐り御為
あり此御社の御事ハ斯くて力を入て説奉る事ハ此
天穂日命ハ一平國の御時ニ限無く御功坐り大神
子御在り坐るを一社だハ大社の列ニ入せ御在り坐
る事無きハ餘りハ心苦しくて思ふえす長説す事
小ハ成た
○出雲臣ハ古事記ハ天喜比命之子建比
良鳥命此出雲國造无邪志國造上菟上國造下菟上國
造伊自牟國造津島縣直遠江國造等之祖也ト有て出
雲臣を出雲國造ト有ハ國造ハ職ハ一ト臣ハ姓あり
國造本紀ト出雲國造瑞籬朝以天穂日命十一世孫宇
迦都久怒定賜國造ト見ゆ此ハ宗神天皇六十年御紀

武日照年一云武夷鳥從天將來神寶藏于出雲大神

宮是欲見焉則遣天天田部造遠祖武諸隅一書云一名而

使獻當是時出雲臣之遠祖出雲振振主于神寶是往筑

紫國而不遇矣其弟飯入根則被皇命以神寶付弟甘美

韓日狹與子鸕濡淳而貢上云云有頃國造ハ

被任ハふりけり右の國造本紀子據ハ此の鸕濡淳ハ

飯入根ハ甘美韓日狹ハ十世孫ハ上ハ其父

世教を合するハ姓氏録右京神別上ハ出雲臣神門

臣等の下ハ天穗日命十二世孫鸕濡淳命之後也

怒命之後也ト有テ一ト違ハるヲ其父飯入根を撰津

國神別ハ土師連天穗日命十二世孫飯入根命之後也

ト見エ其飯入根の弟甘美韓日狹ハ右京神別土師宿

祢條ト天穗日命十二世孫可美乾飯根命之後也ト有

り父子叔姪ハ一ト世教の同ト有リ可キ理無ケルハ

何レハ其差ハ有ル可キ事ハ猶次ハ土師連條

ハ可シ然レトモ國造ハ任ハ奉ル事ハ右の瑞籬

朝ハころ有ケレ猶古ヨリ國造ト云ケル状ハ古ヨリ

彼國ハ住著テ有ケル者ハ其ハ天孫降臨章芽二一

書大己貴神の鎮坐す件ハ當主汝祭祀者天穗日命是

世ト有テ以見ルハ天穗日命此國ハ留坐ガ如クハ

トモ神賀詞ハ乃大穴持命乃申給久云ハ八百丹杵築

宮ハ靜坐支是ハ親神魯伎神魯美命宣久汝天穗比命

波天皇命能年長大御世ハ堅石ハ常石ハ伊波比奉伊

賀志乃御世ハ佐伎波閉奉登仰賜志次乃隨ハ供齋仕

〇日本書紀傳十五
〇二百五十八

奉氏朝日乃豊原登尔神乃禮自利臣能禮自登御禱乃
神室獻良久奏ハ大己貴神の國避の時乃奉給ハる禮
實（不取副て）天穗日命の獲奏の禮實を天神に奉給ハる
を吉例として天夷鳥命より以來其擬びを為して仕奉
るれ一を云ふ由予已に其講義に註るが如くふれハ
天穗日命ハ報命一給ひて後ハ天に留住給ひて此國
に天降給ハるハ天夷鳥命に御在寸事右に引る古事
記に出雲國造ふどの出自を建比良鳥命に係け又上
ある宗神天皇御記に武日照命後天將來神宝云々
有を以て此國に降著て出雲大神に仕奉るれ一ハ右

今事宗神天皇御記
北より正し

今又大宝二年御記
九月乙丑朔乙酉
五位下出雲相賜臣
姓有る其始ハ非
る其頃迄ハ舊國
造を姓と為らる其
職を賜へる

小謂ゆる天夷鳥命あり證あり然るを記傳ハ此ハ天
て此神をも奉て其子孫を出せハ此神功有て御名
高けれハありと云れつれハ神の上ハ其功の多
きも御名の高きも天穗日命に在る事ハ然る事
の由ありむハ天穗日命をのこる奉へりけれ
其然ふのハ別ハ出雲臣と云姓（賜へる）若くハ孝徳天皇
御世に國造を停めりて國司を置き其國造を以て
郡領ハ被成一時ふどや始て賜へりけむ神賀詞ハ出
雲臣等我遠祖天穗比命平國体見ル遣時ハ云々有
り諸姓氏録（姓あり）左京神別ハ出雲臣天穗日命五世孫久志
和都命之後也又（上天）右京神別ハ出雲臣天穗日命十二世孫
鵜濡湍命之後也又（上天）山城國神出雲臣天穗日命子天日

名鳥命之後也又出雲臣天穗日命之後也又河内國神
出雲臣天穗日命十二世孫宇賀都久野命之後也有
て何れも臣姓のこふりあり又左京神別出雲宿祢
天穗日命子天夷鳥命之後也と唯一宿祢姓有ハ其
り後の事にて桓武天皇御紀云延暦十年九月丁丑近
衛將監出雲臣祖人言臣等本系出自天穗日命其天穗
日命十四世孫曰野見宿祢野見宿祢之後土師氏人等
或為宿祢或賜朝臣臣等為一祖之後獨漏均養之仁伏
望與彼宿祢之後同預改姓之例於是賜姓宿祢と有
此一族ふ多可一其後朝臣の姓を賜へり一と云

紀美和五年正月六年正月の下小出雲朝臣と云又名
所見たり右等ハ彼國より上りて仕奉れり庶流の姓
ありが猶本の出雲國造ハ臣姓あり一と云右引ら
如く神賀詞云出雲臣と有ふり然るハ今出雲國造の
姓出雲宿祢ありハ何れの御世に賜へり志姓ありけ
む天武天皇十三年御紀八色の姓を被定らる中一
曰真人二曰朝臣三曰宿祢四曰忌寸五曰道師六曰
臣七曰連八曰稻置と有れハ臣より宿祢に晉りるハ
大あり宗ありを况て朝臣に迄至れりハ京官にて
朝廷に親しく仕奉れハあり然ハ其本と有る出
雲國造の後より臣姫ありハ甚不足の事と有し
り○土師連途仁天皇三十二年御紀云秋七月甲戌朔
己卯皇后日葉酢媛命薨臨葬云云於是野見宿祢進曰

夫君王陵墓埋立生人是不良也豈得傳後葉乎願今將議
便事而奏之則使者喚上出雲國之土部壹佰人自領土
部等取埴以造作人馬及種之物形獻于天皇曰自今以
後以是土物更易生人樹於陵墓為後葉之法則天皇於
是大喜之詔野見宿禰曰汝之便議是洽朕心則其土物
始立于日葉酢媛命墓仍号是土物謂埴輪亦名立物也
云々天皇厚賞野見宿禰之功亦賜鍛地即任土師職因
改本姓謂土部臣是土部連等主天皇之喪葬之緣也所
謂野見宿禰是土部連等之始祖也と有る此時始て
起水々一氏あり姓あり其鍛地ハ其本貫と成り菅

推古天皇十二年御紀
土部連等之墓ハ小
所ハ乃遺土師連猪
手在等喪事ハ自是
皇孫天皇二年御紀
九月丁丑朔丁亥吉備
島皇祖母命葬於此
詔土師連連猪手
視皇祖女喪事ハ有
數是より猶下引
先仁天皇御紀ハ在セ
考上可

原伏見あり其天皇の御陵の地是あり下二百六十一云々見ル其主天皇之喪
葬公職員令諸陵司ハ土師十人掌贊相函禮と有て義
解ハ即土師宿禰年位高進物為大連其次為小連並紫
衣刀劔世執函儀と所見たり鏡記ハ土師宿禰千村土
師宿禰御目土師宿禰牛勝と云けり又等諸陵頭ハ
拜ハ此ハ事見由然るを延暦十六年四月廿三日大政
官符ハ應停土師宿禰等預函儀事伏望永從停止縱有
吉凶同於諸氏其殯宮御膳誅人長及年終奉幣諸陵使
者普擇諸司及左右大舍人雜色人等充之伏聽天裁謹
以申聞者書聞既訖者宣兼知年終幣使者依治部者移

差蔭子孫散位子孫等充之自今以後為永例之所見也
右の土部を波斯倍と有れども次ふる雄略天皇御紀子賢土師部と有し依て波斯倍と訓べし今出雲国出雲郡土師村有と云れハ其より出来れり又土部臣土師連等の土部ハ波斯倍とハ訓べし又波斯倍と訓儲天武天皇十三年御紀子十二月戊寅卯多可
 拜已卯土師連賜姓曰宿祢と有れハ御紀を撰ハレ
 當時ハ已ト宿祢姓と有つと猶本の任ハ土師連
 とハ書されたりつと者あり可一姓氏錄右京神別小
 土師宿祢天穗日命十二世孫可美乾飯根命之後也又
山城國神土師宿祢天穗日命十四世孫野見宿祢之後
別天孫也又大和國神土師宿祢天穗日命十二世孫可美乾飯
別天孫

根命之後也又別天孫土師連天穗日命十二世孫飯
 入根命之後也又和泉國神土師宿祢天穗日命十四世孫
 野見宿祢之後也又土師連同と有り儲野見宿祢ハ右
 小引了統記少天穗日命十四世孫と有る其父ハ甘
 美韓日狭みて飯入根ハ其祖父也當り可けれハ右の
 撰津國土師連の下ふる十二世孫少合レハ乾飯根
 命の世数十二世孫とハ合ハず其土師連ハ並びて 凡河
 内忌寸同神十三世孫可美乾飯根命之後也と有る此
 子て甚分明一き心ちず又此子就て思ふ上二百五
 子引了崇神天皇御紀子其弟飯入根則被皇命以神宝
十七丁

付身甘美韓日狹與子鷓鴣瀟瀟而貢上之有ハ若クハ付
 子鷓鴣瀟瀟與弟甘美韓日狹てハ非ト然らずハ其
 野見宿祢を飯入根命韓日狹命と兄弟二人ナリ出ル
 と云事ハ有ヤキ事アルハ父飯入根子甘美韓日狹
 命孫野見宿祢と見る事アリ
其ハ崇神天皇六十年御紀の右の因の文ニ出雲
 振根云々猶懷恨忽有殺弟之志云云兄擊弟飯入根而
 殺之云々於是甘美韓日狹鷓鴣瀟瀟向朝廷曲奏其狀
 則遣吉備津彥與武甕河別以誅出雲振根故出雲臣等
 畏是事不祭大神と有ルハ其すり兩人共ニ乱を避て
 都ニ止リルルハ一次ニ引ク雄略天皇御紀ハ
イ勢藤形村ふどの事ニて必由有ベキ事共有を考
ふ子甘美韓日狹命ハ其子野見宿祢を 儲又雄略天皇
 國ニ止リて其程都ニ留住ルルハ一事ニ也
 十七年御紀ニ春三月丁丑朔戊寅詔土師連等使進應

盛朝夕御膳清器者於是土師連祖吾首仍進撰津國來
 狹之村山背國內村俯見村伊勢國藤形村及丹波但馬
 因幡私民部名曰贅土師部ニ有ルハ此時ヨて上ニ謂ハレ
 之レ壇輪を作ルリ一を今供御を進ル清器を始テ令進
 給ヘルルハ依テ殊更ニ其部を分テ贅土師部ハ被置レル
 者アリ來狹之村ハ神名式ニ撰津國能勢郡久佐ニ
通證ハ今在宿野村村民今猶造土師と云リ
 神社有リ元明天皇御紀ニ和銅六年九月己卯撰津職
 言河邊郡玖左佐村山川遠隔道路嶮難云々今能勢郡
 是也と見ゆ内村ハ式ニ山城國牟治郡天穗日命神社
 有テ由有ケルルとも其字詔ハ菟道と書ル事アルハ

今二師の本居ハ
大和乎ハハ菅原伏
見の名を移さる
可

今又安南天皇御記
伊勢國來秋登
伊賀土師部と有
る可

ハ通證ハ倭名鈔綴喜郡早智式内神社在丹里村云
ろ如くふろ可一俯見村ハ同書ハ屬紀伊郡深草其俯
見相隣今深草土器師此遺也云ハ其地ハ出來ろ土
偶人を今伏見人形と云も上古の立物の遺ふろ可
藤形村ハ倭姫命世記ハ安濃藤方片樋宮有り神名式
ハ安濃郡加良比乃神社今藤方村ハ在と云ろ右ハ引
ろ土師宿祢の出自を 可美乾飯根命と有ハ合ろ
通證ハ今屬一志郡土人言問掘出古陶器於田野と云
ろを合せ考ろ可き事あり丹波ハ神名式ハ各郡を我神社見え
郡土師又奄我有り姓氏録未定ハ奄我天穗日命之後
龜姓ハ山城國

今同郡大江神社三座
有り此事次多ハ大枝
朝臣の下ハ云ハ一又

今傳子卷ハ九下
引ハ周防國佐郡王祖
神社傳ハ仲表天皇皇祖
の御時此浦ハ即船を寄
れ高田の王を以て是を
作ハハ神伏を傳て
事見又

者ハ有も由有り但馬ハ同扱郷名ハ出石郡埴野波
乃式ハ阿牟加神社有り因幡ハ上郡土師郷有り式
ハ高草郡天野見宿祢命神社御在ハ坐す是あり諸賢
土師部ハ國ニハ在る民部カキハの事ハして其を京子ハ土
師連の掌ハりハあり姓氏録大和國神ハ賢土師連天
穗日命十六世孫意富曾婆連之後也ハ野見宿祢命の
孫あり右の土師連吾筭云人ハ其意富曾婆連と云
三十二年癸亥より此雄畧天皇十七年癸丑まで凡四
百七十一年ふハ上世の人ハ壽永一と雖も其間ハ
三四代ハ必立ぬ可き事あり又思ろ古天皇十一
年御紀ハ来目皇子薨給ひけハハ仍殯于周芳沙婆乃
遣土師連猪手令掌殯事故猪手連之孫曰婆婆連其是
之縁也云事有り此ハ就て思ろ曾婆連ハ婆婆連

の轉ルヲ右の猪手連の父ふとて其婆
連の對へて大婆婆連と云ふ也若此考當ル多時ハ
十六世孫ハ廿六世孫此土師連ト由有ク神社又地名
ありを誤ルハ今也
ハ神名式ハ山城國愛宕郡賀茂波布神社有ハ今上賀
茂末社ハ土師尾社有ク是より右引ク山城國神別
土師宿禰ト由有リ知名汝卿名ハ河内國志紀郡土師
丹比郡土師今道明寺村ハ古土師里ト云テ菅家の御
領ありつゝハ今天神社有ハ次ク文德天皇実録ハ天
安二年三月壬戌朔癸未在河内國天夷鳥命神授從五
位下ト有ハ是より可一又郷名和泉國大鳥郡土師
之右引ク和泉國土師宿禰土師連有リ又中古ハ陶

と云地を陶器莊と云も由有げあり事あり又攝津國
島上郡濃味郷有リ式ハ野身神社見えたり右引ク
攝津國土師連思合又久佐神社可一又右引ク推古天皇御紀
二年御紀ハ土師婆婆連猪手ト有テ其ハ周防國佐波
郡の事ふろハ其子孫彼國ト住テ東鑑文治三年二月
の下ハ權外大江朝臣在聽官人十三人ハ内ハ散位土
師宿禰安利同安弘同助遠同國方同弘正ふと云人名
見え又菅家左遷の時ハ土師氏馳走申され又其酒
岳山ト鎮坐すふと其土師連ト由縁有ガ為あり其寺
の委一キ事今此ト云む煩ハ一〇土師氏ト支別
けハ其御紀の傳ト云ハきあり
化テ菅原氏有リ光仁天皇御紀ハ天應元年六月壬子
遠江介從五位下土師宿禰古人散位外從五位下土師
宿禰道長寺一十五人言土師之先出自天穗日命其十

四世孫名曰野見宿祢昔纏白珠城宮御宇無仁天皇世
古風尚存葬禮無節每有凶事例多殉埋于時皇后薨梓
宮在庭帝顧問群臣曰後官葬禮為之何群臣對曰一遵
倭考王子故事時臣遠祖野見宿祢進奏曰如臣愚意殉
埋之禮殊乖仁政非益國利人之道仍率土部三百餘人
自領取埴造諸物象進之帝覽甚悅以代殉人号曰埴輪
所謂之物是也此即往帝之仁德先臣之遺愛垂裕後昆
生民賴矣式觀祖業吉凶相半若其諱辰掌凶祭日預吉
如此供奉允令通途今則不然專預凶儀尋念祖業意不
在茲望請因居地名改土師以為菅原姓勅依請許之

有て菅原氏の起是あり上より引る密仁天皇御紀より土
部連等主天皇喪葬之縁也と見え雄略天皇御紀より使
進應盛朝夕御膳清蓋者之有れば實より吉凶相半若其
諱辰掌凶祭日預吉如此供奉之云事の虚よりさる
を曉る可し土師ハ謂ゆる名ふして職号ありとも居
地より因て菅原姓を賜りしむ事を請奉れりハ其凶を
掌る事を止て清浄スガしき意味を下り含めて奏せりし
者あり桓武天皇御紀より延暦四年十二月甲申故遠江
介從五位下菅原宿祢古人男四人給衣糧令勤學業以
其父侍讀之勞也と有り當時已久儒流の家ありしと

見ゆ延暦九年十二月壬辰朔辛酉勅外從五位下菅原
宿祢道長云々等並賜姓朝臣と有り姓氏錄右京神別
下天孫
小菅原朝臣土師宿祢同祖乾飯根命七世孫大保度連
之後也と見え神名式大和國漆下郡菅原神社有て
野見宿祢以来本貫の地是あり此社を大和志今在
菅原村稱菅原天神と云り岳仁天皇九十九年御紀小
天皇崩於纏向宮云々葬於菅原伏見陵と有る古事記
小ハ御陵在菅原之御立野中也と所見なるが如く古
より菅原と云一地ふりけり古今集率此所吾世
里の荒まくも惜しと詠らも此地あり備右子引ら雄
略天皇御紀小賢土師部の住居りし俯見村ハ山城の

あるが其民部の大和の伏見より移り住ひけり故に
其名の移れると有ぬ可く所思ゆ事あり上云
るを合せ○秋篠も土師の同族あり桓武天皇御紀小
延暦元年五月癸卯女母記正八位上土師宿祢安人等
言臣等遠祖野見宿祢造作物象以代殉人岳裕後昆生
民頼之而其後子孫勳預凶儀尋念祖業意不在茲是以
土師宿祢古人等前年因居地名改姓菅原當時安人任
在遠國不及預例望請土師之字改為秋篠詔許之於是
安人兄弟男女六人賜姓秋篠と有ハ上あり天應元年
の度子擬ひて請奉れり者あり此の右ハ准へて
居地の名子因て秋篠と云も清明き事ハ係て請奉れ

るありむ事右の菅原子於るが如し又同四年八月
癸亥朔右京人土師宿祢淡海其姊諸主等改本姓賜秋
篠宿祢之見元又九年十二月辛酉勅外從五位下菅原
宿祢道長秋篠宿祢安人等並賜姓朝臣之有り姓氏錄
右京神別下天孫秋篠朝臣土師宿祢同祖乾飯根命七世孫
大保度連之後也之有て菅原朝臣大枝朝臣ふと並
出たり此ハ謂ゆら秋篠里ハ一て菅原と相並へる地
あり新古今集秋篠ヤ外山の里ハ時雨るう切生駒
ふ嶽子雲が懸れと詠こ又歌は多く秋篠里と
詠るハ此所より○大枝ハ後ハ大江と改む土師の同族あり
桓武天皇御紀ハ延暦九年十二月壬辰朔詔曰云二宜

朕外祖父高野朝臣外祖母土師宿祢並追贈正一位其
改土師氏為大枝朝臣夫先秩九族事彰常典自近及遠
義存曩昔亦宜菅原真仲土師管麻呂等同為大枝朝臣
矣之有ハ此より以前ハ同八年十二月乙未皇太后崩
壬子葬於大枝山陵皇太后姓和氏諱新笠贈正一位乙
継之女也母正一位大枝朝臣真妹之有ハ如く皇太后
を大枝山陵ハ葬奉れり就て其外祖父土師宿祢を
進尊びて大枝朝臣の姓を賜へるを以て其一統の姓と
成されし者あり同九年十二月辛酉正六位上土師宿
祢諸士等賜姓大枝朝臣其土師氏惣有ハ四腹中宮母家

者是毛受腹也故毛受腹者賜大枝朝臣自餘三腹者或
從秋篠朝臣或屬菅原朝臣矣と有る右の中宮母家と
ハ右子皇太后母贈正一位大枝朝臣真妹の^ス分を云不
り姓氏録^{右京神別}下天孫^ハ大枝朝臣土師宿禰同祖乾飯根
命七世孫大保度連之後也と有り右の山陵の有る大
枝ハ和名抄郷名子山城國乙訓郡大江^{江於保}と有る此
地あり故後子大枝を大江とハ改^ルルなり宿禰名式
子葛野郡平野祭神四座^{並名神大}と有る御社ハ一も
故有て桓武天皇の後王の持齋^ル可き由己ハ祝詞
講義小述^カ如^一四時祭式斎服條^ハ物忌王氏云^ニ

和氏大江氏並云^ニと有る此皇太后の御父母の氏ニ
あり大政官式子も凡平野祭者桓武天皇之後王^{改^レ姓}
者亦及大江和等氏人並預見参^ト所見たる是あり其
第五縣神と申すハ式外ありガ二十二社神體秘記ハ
縣神社一座天穗日命と見え注式子も縣神^{天照太神}
中原清原菅原秋^{子穗日命}と有るハ大江氏子も氏神と申すハ
篠^{以上}四姓氏神^ニ又上^{百六十}ふも云^テ如^ク和名抄郷名
子因幡國八上郡土師大江と有る神名式子同郡大江
神社三座と所見^ルなり故有る事^ハありむ^{同國高草郡}
神社天日名鳥命神社阿太賀都健御能命神社^{天穗日命}
宿禰命神社有^ル必由有^ル事あり可^一借其大江神

社を因幡志と云物中_ハ中大已貴命左天穗日命右三穗
 津姫命大江御財原_ヲ射原大明神也と所見たりあり
 ○天津彦根命古事記_ハ天津日子根命と作り備彦
 ハ男を云ひ根ハ尊称と見ルバ記傳_ハ名義異あり事
 無_レと云ル_ハカ如く_ハ其_レも其_レも唯_ハ男_子と
 申すのこの事_ハ何と号_クとも同ト事あり彼大
 倭國者以行事負名國也と云ふ古語の趣_ハも合_ハず
 故此を以て考_ル其御子天麻比止都根命_ハ對_スる
 即名_ヲ御在_リ坐_ケり故此彦根_ト其_一根_ト並_ビ
 て麻_ハ眞_ノ義_ハル_バ天孫降臨章第二_ニ書_キ天目_一
 箇神_ト有_ル強_ク正字_トハ云_ベう_ラざ_ルあり然_レバ
 此_ノ彦

根_ハ味耜高彥根神_ノ彦根_ノ如_ク語_ノ下_ニ添_テ申_ス
 稱_ハ辞_ハ非_ズして彦根_ト云_フ即_チ神名_{アリ}者_{アリ}
 備_一根_ハ古事記_ニ生_ニ女鳴_亦名_謂天_一根_ト有_ル其_レ
 属_{タル}速吸名門_ノ形容_ミて固_{ヨリ}女陰_ノ名_ヲて_ハ
 有_レども敏達天皇十二年御紀_ハ以_テ汝_之根_入我_根内
 と云語_も有_テ根_ハ男_女と亘_ル名_{ナル}ハ男_神ふ_らむ
 う_らよ_一根_トハ云_ハし_キ非_ズ其_ハ傳_六九_十云
 り若_テ其_レ記_{石屋}戸_段ヲ求_メ鍛_人天津麻羅_而斜_伊斯_許理_度
 命_令作_鏡と見_えたり_古語_拾遺_ハ令_天目_一箇_神
 作_雜刀_斧及_鐵鐸_ト有_を合_スル_ハ天津麻羅_命と申_ス
 亦_名有_リ男_莖を_麻羅_ト云_フ是_レなり_綏靖_天皇_御紀_ニ

倭鍛部天津真浦と云人名も所見たれば、麻羅と号
すハ鍛冶に限た事コクバヒの如くあり故思ふに金鐵を鍛
ふ状ハ一も男女の交合コクバヒするが如く其勢チケり感けて事
成る者より有ければ其男莖アユふと小育る由あるの有
て然ハ御名に負給へる者あり然れば此天津彦根命
も其鍛冶の事預給へる由物ハ所見ざれども然
る御子を持せ給ふと云も実ハ第一書に在る如
く其物根ハ劍より成坐り一神子御在り坐ければ然
る御功の坐り依て彦根とハ御名に負坐るあり凡て
比古と云ひ女を比賣と云ハ其男女の根因て号け
たる物あり事已に傳五巻に註るが如し因男莖を以

て御名に負給へるハ如何ある事の如くあれども然
申奉りて鍛冶の祖神なる義あり怪しむ可きは非
ず亦備出雲風土記に意守郡屋代郷郡家正東卅九里一
百二十歩天乃夫比命御伴天降神伊支等之遠祖天津
日子命詔吾靜將坐社詔故云社神龜三年と有ハ姓氏
録未定雜姓和泉国 茨水造天津彦根命後者と見え例も有ル
ハ根を省きて天津日子命とも申奉るありけり此神
の天降坐る事此より外ハ物も所見ざれども御兄
天穗日命と伴ひて共に御力を合せ御在り坐て御功
を立給へり一事右まで知らる伊支等之遠祖と云ハ
壹岐島に其御裔の有を云ふり 神名式に意守郡由貴

神社有り壹岐島を雪島之云事万葉にも見えたり其
事傳六百四十云ろを見て知べきあり若て彼島に
其所縁を求るに石田郡見上神社見ゆ和名枚郷名に
近江國野洲郡三上美加と有て式に御上神社名神大
嘗見えたり其を古事記伊邪河に近於海之御上祝以
伊都玖天之御影神と有に姓氏録に天津彦根命明立子天
御影命と有を以見れば右の見上神社も同神にして
天津彦根命の御子とれば其御裔の人共の彼國に任
し就て祀祭れりし者あり借伊支ハ直とも臣とも
云ふ如き姓ふども非れば唯彼島に住居る部と云の

こして主として類ふるざりけむ事云も更なり此
支の事ハ用無きに似たりと雖も此事の徴有て明る其伊
りありし就てハ天津彦根命の此國に降生し事あり実
定る事ありが為なり神典を記傳七五十に神名式伊
説く者此心無ハ有べし六丁に神名式伊
勢國桑名郡多度神社名神大ハ此神ありと云姓氏録右
神別下天孫に桑名首天津彦根命男天久之比命之後也と
有り取と云れなり其ハ同式に同郡桑名神社二座と
有る是あり可し又和名枚郷名に同郡桑名久被額田
召加と有を式に同郡額田神社有も由有る事あり古
多額田天津日子根命者事記に額田部湯坐連等之祖也と見えたるを右に引る姓氏
録に依り明立天御影命に坐あり可し猶此國に於てハ

朝明郡も額田郷有り神名式も同郡伊賀留我神社
 姓氏錄左京神別額田郡天津彦根命孫意富伊我部
 命之後也も有り名り河曲郡高市神社同錄右京神別
 高市連天津彦根命三世孫彦伊賀部命之後也も有り
 名り鈴鹿郡アノミツノカミ天一鉏田神社古語拾遺も天目一箇命筑
 紫伊勢兩國忌部祖也も有り又叶へり如此く多度神
 社も天津彦根命御在一坐て其隣郡も其御子孫の
 神等の鎮坐す事實も故有る事共あり又近江國も
 其由有る神等の御在一坐す事ありず其ハ先神名
御上神社名神大相嘗教嘗ハ天之御影神坐事右
云々ガ如ク蒲生郡菅田神社ハ姓氏錄も菅田首天久

斯麻比止都命之後也も有り又蒲生郡有る古事記も
 天津日子根命者蒲生稻寸等之祖也も有る上二百四
 十六丁馬見岡神社の傳も云る如く蒲生直の遠祖於
 保加夜都比古命も云有て神武天皇御世ハ天穗日命
 比都佐神社有る其祭神天津彦根命山津照命日巢命
 比呼命も由馬見嶺神社記も見えたり又犬上郡有
 一を隔てて伊勢國ハ此多度神社の御事の物あり所
 見たりハ桓武天皇御紀も延暦元年冬十月庚戌朔叙
 伊勢國采名郡多度神從五位下仁明天皇御紀も天長
 十年四月庚辰奉授伊勢國從五位下多度大神正五位
 下兼和六年十二月巳酉朔丁巳奉授伊勢國正五位下
 多度大神正五位上同十一年六月癸丑朔丙辰奉授伊

勢國正五位上多度神從四位下文德天皇實錄嘉祥
三年九月乙亥朔甲申詔以伊勢國多度大神列於官社
之有り然るに同十月乙巳朔癸丑以伊勢國多度神列
於官社之有ハ同ト事の重複ル多あり清和天皇實錄
子貞觀元年正月廿七日甲申奉授伊勢國從三位多度
神正三位之有ハ嘉祥より此年迄の間ト從三位ト
被成トを漏ラレたりト者あり同二月十七日癸卯授
伊勢國正三位多度神從二位同十九日乙巳遣正五位
下守右中辨兼行式部少輔大枝朝臣音人向伊勢國多
度神社尾張國熱田大縣等神社奉神位託財室同五年

六月廿六日丁巳進伊勢國從二位多度神階加正二位
之有り又光孝天皇實錄仁和三三年四月六日己酉伊
勢國 明 多度神社 之有り俗トモ北伊勢
大神宮トモ申奉ラ計ト古ヨリ榮給ヘル御社トモハ
其天津彦根命を齋奉ル御社ハ此多度神社ト本不
リける 或書ト引ラ延曆廿年東名郡多度寺縁起私財
帳ト以去天平宝字七年歲次癸卯十二月庚戌
朔廿日丙辰神社以東有井於道場滿願禪師居住敬造
阿弥陀文六丁時在人託神云我多度神也云云於茲滿
願禪師神坐山南邊伐掃造立小堂及神御像号於多度
大菩薩云云跋文云多度大神一切神等云云有て此
寺を神宮寺ト書リト云リ當時坊僧有て然ラ僻事を
企タルを以てト並ニ御社ト云リト事ハ知ラ
亦社傳ハ更ナリ今現ト人の見たり聞たり知ラ事不

るが伊勢國の北方より洪水又ハ暴風の災有る時ハ此
神の出現ル御在り坐て防がせ給へり其神幸の時ハ
山河鳴動なり神鳴り電光して甚可畏き神威絶すと
あむ神社啓蒙よ此社の事を在多度村此社傍ハ社俗
稱一目蓮者多度大神之子天麻比止都根命なり有ハ
然る事あり此社多度山の南端に在り其北ハ美濃國
あり統紀養光元年九月の下に幸多者郡多度山美泉
と有を以て兩國に亘れる少く事を曉る可し
美濃國多藝行宮大伴宿禰家持作歌一首と有て田跡
河之邊平清美香從古宮は兼多藝乃野之上尔と有り
多度山に添て美濃國より流るるを田跡河と云りと聞ゆるあり
〇九川内直の九川

内ハ安閑天皇御紀に大倭國と云て下に大河内と並
出せり如く倭の河内も共に大字を冠て唱たり
つら者あり記傳七七十三丁に九河内ハ即河内國あり和
名枚に河内加不知と有り安閑天皇元年御紀に大河内
直味張更名推古天皇十六年御紀に大河内直糠なり
と有て凡ハ大の意あり名義ハ倭京にて山代大河所
河の此方に在る國ありハ其内と云意あり本ハ大河
内と云しを諸國の名必二字に定めり此により大を
ハ除きて唱つらむ凡オウミも書ける事ハ意當とハ云
ハて意布志と云習へり故あり可し凡の假字ハ和名

坂郷名子丹後國加佐郡凡海を於布之安万と有之依
べし又統紀四十五丁二十下十讚岐國寒川郡人正六位上凡
直子継等言子継等先星直云之継國造之業管所部之
坂於是因官命氏賜之故拔大押直之姓而庚午年籍改大
押字仍注星直云之有北ハ此子因て 意富志之訓
むも悪う補以上と有之如し又遠江國造傳抑固
銅六年詔之畿内七道諸國郡郷名者好字之見元出雲
風土記亦神重三年子郡郷名の文字を多く改り
北一事見元民部省式九諸國郡内郡里等名並用二
字必取嘉名と見ゆと云凡九此意を念て説を成
る北凡直ハ古事記ハ凡河内國造と有り國造ハ職
子て直ハ姓あり事上子註せり出雲臣の例の如し國

造本記ハ神武天皇功臣ハ封子給之中子以彦已蘇根
命為凡河内國造即凡河内忌寸祖と有て次子凡河内
國造攝原朝御世以彦已曾保理命為凡河内國造と見
元九り彦已蘇根命彦已曾保理命同ト人ハて天津
彦根命の孫ハ也 當 可ク又天神本記ハ
天御陰命凡河内直寺祖と有ハ姓氏錄額田部湯坐連
條ハ天津彦根命子明五天御影命と有ハ同神あり然
るハ額田部條ハ同 命孫意富伊我都命と有ハ
とも其命ハ額田部河田連條ハ同神三世孫と有り高
市連條ハ同命三世孫彦伊賀都命と有北ハ同ト人子

今其彦伴賀都令也
 三ノ工ノ田ノ可勝
 十二信ノ菅田首條
 和名枚郷名ノ越前
 婦貞部菅田須賀多
 有ノ神名式ノ新州郡
 建百勝神社有ノ其向
 神ノ通ヲ同郡ノ
 布留郷佐味郷有リ
 共ノ叙ノ依ハ地多ク
 同ノ神ノ叙ノ依ハ地多ク
 山ノ云山名ノ知山
 前國敷實郡天利
 神社有リ此比神社
 支社有リ右ノ山ノ
 峯ノ叙ノ依ハ地多ク
 山ノ云山名ノ知山
 前國敷實郡天利
 神社有リ此比神社
 支社有リ右ノ山ノ
 峯ノ叙ノ依ハ地多ク

小て三世孫ノハ子と孫とを除きて其次ありを云ハ
 ハ彦已曾保理命ハ天津彦根命ノ孫ノ當り可き者也
 其額田ノ河内國河内郡ノ在る郡名ありノ思合
 寸可き者あり 猶其事ハ下章第三一書ノ天津彦根命
 命ノ云事ヲ可一諸其彦已曾保理命と申すハ彦小添
 穂添山と見え九ノ下ノ添山此云曾褒里能耶麻ノ注
 此ノ本生ノ地名ノ神武天皇ノ任奉りて日向國ノ住
 二郡ノ分ハ大和國添上曾不乃加美添下曾不乃之毛
 録ノ添縣主ノ故ノ初年祭詞ハ曾布ト云添下郡縣坐
 社ノ申すも有リ故思ノ神武天皇ノ檀原ノ都ノ地
 給ハけり始ハ此命其地ノ住居ノ後ノ曾布ト短く呼
 名を移して曾保理と云けむを後ノ曾布ト短く呼

今其彦伴賀都令也
 三ノ工ノ田ノ可勝
 十二信ノ菅田首條
 和名枚郷名ノ越前
 婦貞部菅田須賀多
 有ノ神名式ノ新州郡
 建百勝神社有ノ其向
 神ノ通ヲ同郡ノ
 布留郷佐味郷有リ
 共ノ叙ノ依ハ地多ク
 同ノ神ノ叙ノ依ハ地多ク
 山ノ云山名ノ知山
 前國敷實郡天利
 神社有リ此比神社
 支社有リ右ノ山ノ
 峯ノ叙ノ依ハ地多ク
 山ノ云山名ノ知山
 前國敷實郡天利
 神社有リ此比神社
 支社有リ右ノ山ノ
 峯ノ叙ノ依ハ地多ク

事ノハ成ルルありガリ神名式ノ同郡菅田神社見
 元姓氏録ノ菅田首天久斯麻比止都命之後也ハ有
 考令ノ凡川内直ハ右ノ引ノ御紀ノ大河内直ト二所
 出たり又記傳ノ天武天皇御紀ノ十二年九月乙酉
 朔丁未凡川内直賜姓曰連十四年六月乙亥朔甲午凡
 川内連賜姓曰忌寸ト有リ又此氏人の中ノ清原宿禰
 云姓を賜ヒ一事仁明天皇天長十年御紀ノ見田清
 内ノ河内ノ縁あり可ト云ハナリ姓氏録ノ天孫
 凡河内忌寸額田部湯坐連同祖ト有ハ其條ノ天津
 彦根命子明立天御影命之後也ト有を云あり文武天
 皇御紀ノ慶雲三年冬十月壬午撰津國造從七位上凡

あり又同抄郡名入部
 記多し有は其西隣
 此より其は彼は懸鏡
 の御事記た地名
 と聞え

河内忌寸進^{石麻呂}位一階之有は然るを後^{撰津を省きて唯}國造と云氏と
 成れるは撰津國司を廢して撰津職を置れたるより
 の事多可ト同録右の凡河内忌寸子次國造天津
 彦根命男天戸間見命之後也と見え臨時祭式子凡座
 摩至取都下國造氏童女七歳以上者充之と有る是不
 り神名式子撰津國菟原郡河内國魂神社^歟と有は此
 氏神あり可し和名枚郷名子同郡覺美と有は古事記
 石屋小求鍛^{天津}入麻羅而科伊斯許理度賣命令作鏡と有
 戸段縁有り又歌枕子御影森と云も其天御影命の御名
 小田有糸と少りも間然^{イッラ}ありざるあり妙子奇しき事

此人名統紀養老五
 年正月御紀延正
 六位上河内忌寸足
 出たり
 但傳二十卷三百十
 分類田部湯坐連坐
 小引ら神護景雲二年
 御紀子石見國美濃郡
 人類田部兼提督と
 云人名有は神名式子
 同郡津羽天勝命
 命三母孫彦伊賀郡
 命と思ゆは元未其
 美濃國の地名を移
 して美濃郡と成れ
 る者と見えたり

ありけり^備又同録同ト撰津國子凡河内忌寸天穗日
 命十三世孫可美乾飯根命之後也と有は
 記傳子遠祖御兄弟の間傳の混ひつるあり可しと云
 化たるは信は然る事あり又之を省きて唯は河内忌
 寸と云るも有けるは大同類聚方子三野藥美濃國
 本巢記人之家方と有は並びて宇佐藥美濃國紀人之
 家方と見えたるは一本は河内忌寸人足云と見え
 えたる是あり然れども外は見當らざる事ふれば
 打任せらるる^稱○山代直ハ先國龍の事を定の置こ次
 子云べし此ハ神武天皇御紀子大倭國の事を凍有美
 地青山四周と見え又中洲之地と宣ひ又大己貴大神
 目^之日玉牆中國と云古語をも載しければ其背面
 子在を以て記傳七^{七十}子書紀子山背と書る字の如
 くあり可しと云化たるが如くあり崇神天皇十年御

紀に武埴彦與妻吾田媛謀反逆與軍忽至各分道而夫
從山背婦從大坂共入之有之大坂ハ葛郡コノ河丹
國郡コノの坂コノあり山背コノ並出せコノハ次コノ山
背擊埴安彦云コノ則卒精兵進登耶羅山而軍之コノ有レ
バ其山を堰コノとして丹を大倭コノ云コノ外を山背コノと古ク
云來コノルコノあり山城風土記コノ賀茂大神の遷幸の事を
宿坐大倭葛木之峯自彼漸遷至山代國岡田之賀茂隨
山代河下坐葛野河與加茂河所會云コノ自彼川上坐足
坐久我國之北山基コノ有を以ても上戸百樹説コノ上古
ハ山代國コノ云コノハ今の相樂綴喜久世等の三郡の邊

ありと云コノハ然コノ事コノて今の宇治川以北ハ右コノ依
ルバ久我國コノふコノと云コノけコノるコノやコノ 岳仁天皇十五年御紀
醜コノ返コノ於コノ本土則羞其見返葛野自墮輿而死コノ之故コノ号コノ其地
謂コノ墮國今謂コノ弟國訖也コノ有コノハ今コノのコノ訓コノ郡コノのコノ故事コノあり
不コノ故コノ古事記コノハ山代之大筒木真若王又山代之大國之
淵之女芥羽田刀辨コノふコノと云コノ人名コノハ和名抄コノ郡名コノ綴喜
と見えコノ郷名コノハ宇治郡大國相樂郡解コノ蟠コノ加無コノふコノと有り
又山代之幣羅坂コノ郷コノ名コノハ久世郡耶羅コノと有コノるコノ是コノハ
コノ今綴喜郡コノ屬コノて奈良村コノと云コノと云コノり又山代之和
訶羅河ハ謂コノゆる泉川コノふコノるコノ古コノより大名を山代河と
云コノり又山代國之相樂コノハ同郡名コノハ相樂コノ佐加コノと有コノり又

此子欽明天皇三十一年御紀子山背高城館見中
郷名子相樂郡大泊又下泊之毛都古末など人名子地名
子も上子山代と冠子事八字治河より以南子限
る事と見え右子引る岳仁天皇十五年御紀子葛野
自墮輿而死之と有子葛野郡あり應神天皇六年御紀
子幸天皇近江國至菟道野上と有る是八字治郡あり
然りと雖も彼河北ハ何れも上古子山背と云る地方
子てハ非り一故あり猶其事を想ねて甚慥ふるハ神
功皇后御紀子武内宿禰等選精兵從山背出之至菟道
以屯河北と有る此山背時菟道ハ今の如ありむハ山背菟道と云ハ

きを然るぬハ右の如き子細有が故あり猶仁徳天皇
三十年御紀子皇后不泊于大津更引之沂江自山背廻
而向倭明日天皇遣舍人鳥山令還皇后乃歌之曰夜暮
之呂珥伊辞鷄苔利夜暮云云皇后不還猶行之至山背
河而歌曰兔藝泥赴椰莽之呂餓波鳥箇破能明利云云
即越那羅山望葛城歌之曰兔藝泥赴椰莽之呂餓波鳥
涿椰能明利云云更還山背興宮室於筒城岡南而居
之冬十月甲申朔遣的臣祖口持臣喚皇后云云歌曰椰
莽辞呂能菟云云紀能涿椰珥云云十一月甲寅朔庚申天
皇淳江幸山背云云乘輿詣于筒城宮喚皇皇后不參見

時天皇歌曰鬼藝泥 赴椰摩之呂謎能云と有て皆
上子引る例共子異ふるざりける者あり 右の百樹説ハ伴信友ハ
瀬見小河子引るを再引たりあり彼人の著述ハ山城
國号考云物有_一由其書云_一ハ甚床_一き者_一ハ
ども予未得見知_一る_一ハ彼人の云所_一ハ然_一の_一異_一ふ_一事_一有
べ_一る_一如_一く_一ふ_一ル_一ハ彼人の云所_一ハ然_一の_一異_一ふ_一事_一有
所思_一え_一たる_一 備又神名式十久世郡水主神社十座と有
ろ下_一ハ山背大國魂命神二座と有_一其_一三_一郡_一子_一聯_一ル_一
ハ古_一子_一山_一背_一と_一云_一け_一ル_一ハ河_一を_一堺_一と_一して_一其_一南_一方_一久_一世_一郡
綴喜郡相樂郡と宇治郡の河南を合せて其山背の部
内あり_一者_一こ_一ふ_一ハ所_一見_一たり_一け_一ル_一然_一ル_一ハ今_一の_一乙_一訓_一葛
野愛宕紀伊の四郡を合せ云ハ良後の事_一ハ_一有_一け

ろ然_一ろ_一を_一其_一南_一北_一を_一共_一子_一併_一せて_一 後_一と_一字_一ハ山_一背_一國_一と_一書_一さ_一ル_一て_一御
紀統紀共_一子_一同_一ト_一きを_一紀_一略_一延_一曆_一三_一年_一十_一一_一月_一詔_一ト_一此_一國
山河襟帶自然作城因斯形勝可制新号宜改_一山_一背_一國_一為_一
山城國_一と有_一ハ字_一を_一被_一改_一たる_一の_一ミ_一あり_一子_一可_一制_一新_一号_一と
と有_一ハ上_一子_一云_一る_一如_一く_一山_一背_一と_一云_一ハ大_一和_一國_一を_一中_一洲_一と_一
て其_一山_一の_一背_一面_一あり_一義_一あり_一を_一今_一此_一國_一子_一大_一宮_一敷_一給_一へ_一る_一
子_一就_一て_一ハ_一此_一を_一中_一洲_一と_一立_一給_一ふ_一意_一を_一て_一群_一山_一の_一相_一圍_一より
て自然_一子_一城_一郭_一の_一形_一勝_一有_一子_一就_一て_一山_一城_一と_一字_一を_一易_一させ_一給_一
ひて其_一唱_一ハ同_一ト_一き_一物_一ク_一背_一と_一城_一と_一其_一義_一を_一殊_一子_一為_一さ_一
せ給_一ひて_一万_一世_一子_一易_一る_一可_一く_一さ_一ら_一大_一宮_一所_一を_一壽_一祚_一へ_一さ_一

世給へる御事子ふむ有けり此事音より能る心得たり
 や右の新号の字子驚きて此山城ハ神武天皇御紀子
 茅渟山城水門と云号有る其唱の如く夜麻伎と訓た
 めろを後と和名抄ハ山城夜萬之呂と云状ハ本の唱
 へ子返せる者の如く心得たり入る有る由ふるハ甚
 愚多る説あり又御紀の中にも敏達天皇三十一年ハ
 山城國相樂郡と有ハ例ハ違ハレハ誤あり其次ハ山
 背高城館と有を合せて知べし又國造本紀ハ山城國
 造と山背國造と二並べ出せりハ其國造の統二ある
 を分てろのいふハ ○山代直古事記ハ山代國造と有
 ハ議論ハ及ハス
 里國造本紀の首ハ天目一命為山代國造即山代直
 祖と有る天目一命ハ天津彦根命の御子子御在ハ坐
 れども此ハ神武天皇御世の事子ハ叶ハズ其天目
 一箇命の子又孫子_ニ在けしを其名を漏ハ脱せり者と

全六の姓氏録未定雜
 姓山城國ハ山代直ハ
 明命之後也と有同
 別天孫ハ水主直大明
 年之後也とも有り其

所見たり其次ハ山城國造播原朝御世阿多根命為山
 代國造と有ハ必其人多可一然レバ右の凡河内國
 造の祖彦已曾保理命と兄弟ありともや有む其曾保
 理ハ日向の地名子本着けむ事上二百七十六丁ハ註ろが如
 くありハ此阿多根命の阿多も天孫降臨章ハ吾田長
 屋笠狭之碕と云地名有レハ其子因レる名あり可け
 レバ此も東征の供奉とて功有一人あり故ハ山代
 國造ハ封ハ奉給ひ一者とあり思元たり然るハ天
 天伊岐志近保命山代國造等祖と有ハ饒速日命の御
 事子一て天孫本紀ハ玉勝山代根古命山代水主崔部
 連等祖と云一統ハ一國造本紀ハ山背國造志賀
 高元穗朝御世以曾能根命定賜國造と有る是あり混

事勿ハナル 記傳七七十 小天武天皇御紀小十二年九月
 乙酉朔丁未山背直賜姓曰連十四年六月乙亥朔甲午
 山背連賜姓曰忌寸と有り文武天皇御紀小慶雲三年
 冬十月壬午山背國造外從八位上山背忌寸品遲進位
 一階之見元姓氏錄山城國神 小山背忌寸天都比古祢
 命子天麻比止都命之後也と有り統後紀小天長十年
 山代忌寸淨足同姓五百川等八人改忌寸賜宿祢淨足
 等天津彦根命之苗裔也と見補 意と有り猶同錄攝津
別天 孫 小右子引孫 九河母忌寸又國造の二氏孫 次て山
 代直天御影命十一世孫山代根子之後也と見えたる

朝野群載五卷下
 田原御來極住人山
 背成武と云々名見え
 たり同族の人多かり

其人ハ神功皇后御紀小天照太神誨之曰云々當居御
 心廣田宮即以山背根子之女葉山媛令祭亦事代主尊
 誨之曰祠吾于御心廣田國則葉山媛之弟長媛令祭と
 有る是子て其女二人を以て其二神を令祭給へるハ
 右九川内直條と云る如く彼撰津國造とて其國小
 在一バ國造ホ一て部内の神社を祭る例子依れり
 者あり 斯レバ國造本紀小九河内國造と山代國造と
 を二流子立たれど其本一子て有るを神功
 皇后の當時も猶分れずて有けり然るがレバ斯
 まで此彼打合ふ事ハ無き筈の者ありを思ふ可なり
 神名式小山城國久世郡水主神社十座並大月次新嘗
 天照御魂神水主坐山背大就中目水主坐
 國魂命神二座預相嘗祭

右の由子依らば山代直の祖神あり然るも小姓氏録山城
國神別子水主直火明命之後也と有り其天照御魂神
天孫
ハ乃火明命子坐て謂ゆる饒速日命子御在せらる天
神本紀小天伴岐志近保命山代國造等祖と有て天孫
本紀子天火明命亦名膳并磯丹并穗命と有子合り儲
其十座ハ其紀子依て考らる右の天火明命亦云天照を一
として二小天香詔山命三子天村雲命四子天忍男命
五子建額赤命六子建筒草命七子建田背命八子建諸
隅命九子倭得玉彦命十子玉勝山代根古命子て其數
合らる如き小依て延佳説子天照御魂神者天火明命

山背大國魂命者玉勝山代根古命子と有れども國魂神
と申すハ其國作の事子功有る神子稱る例あるを天
孫本紀子其命を山代水主雀部連等祖と耳ころ有け
れ然稱るる由も所見がれども左京神別姓氏録小接
室連火明命十七世孫云こ干時古麻呂家在山城國久
世郡水主村と有れハ世々其水主村小住れあり然
れども佗氏の神を祭る可くも非れハ玉勝山代根
古命と為とも違ハざるが如し然ハ云へ右の山代根
子命と此命の山代根古と同一く彼も山代直此も同
録未定雜姓子山代直火明命之後者と有れハ其定む
山城國

傳子二卷中
水主神社の下
五丁目と云ふ
す可

る所を知らざり統後紀中永和十一年五月甲辰奉
授山城國水主神從五位下三代實錄子負觀八年十一
月廿日授山城國從四位下水主神從四位上又讚岐國
大内郡水主神社見ゆ此水主神社二所共子此子用無
事ありとも右の山背大國魂
命神の事子就て注せこあり同郡伊勢田神社三座
有を或説は按山背根子命水主氏祖既祠之因其女葉
山媛祭伊勢荒魂亦建祠乎從祀同時所顯雅日女事代
主歎と云り右の山代根子命と玉勝山代根古命と同
氏よりて同名同名ハして同時の人の如く見ゆハ
何ルホウ傳の混ルつる者ありむらと所思ゆルども
今其定むる所を得知ず△○活津彦根命の活ハ字の如し活津ハ天
孫降臨章第四一書子天穗津大來目と云神名の穂津
小同トク天上の事子称云ふ言みて此國土とて事物の

盛小饒ハハ多事を豊某と云み同トウ多可一備其穂
ハ靈異クシビの意やして其本語氣為あり其ハ天日御國ハ
一ハ皇祖天神の皇産靈の御徳を成一給ふ所ありガ
其至リハ國土ハ萬物の資ヨリて生ナクとして蕃息オヒニケルも
其元ハ謂ゆる天氣クニケハ其徴ハ日光ヒハ在る事あり
此を以て櫛某と申す神名の多く御在し坐す由傳ハ
四下小巳コト註せらるが如し津ハ處の義子て其靈異を
成す處を云ルハ穂津ハ天を云事本よりの事あり又
此活津も右小同トク活ハ氣イキみて天中の氣を云る其
元ハ皇祖天神の御徳ハ資ヨリれり事あり故活津と云て

ハ次子能語據
持日年奇い上生
坐す所謂之同上義
多者子殊此
神守ハ彼次葉
噴之狹務成語ハ
ら其即活津ノ活
ありけり

天の事ふる者あり傳四四十も云るが如く姓氏録
小高魂命兒伊久魂命と有る氣息を調へて萬物を活
し給ふ神あり由あり神世七代章子活撒尊と有る生
活く物を組出し給ふ義あり傳五五十も云り右等ハ
此國土に物の成出て生るを以て云事ふるが其原ハ
上天下に有けれハ天を活處と云義を以て活津と
も云る由ありを思ふ可く記傳も右の神等を
引出雲神賀詞に今日能生日能足日云ふとをも引
て是を以思ふは活津神より起りて生活の字の意に
て本質言ふるを以て美祢つるあり可しと云れつれ
とも唯質言を以て美祢つるあり可しと云れつれ
事共 偕天津彦根命活津彦根命ハ別神ハ御在し坐

ト然るハ天忍穂耳尊ハ天津日継の大御祖小御
在し坐せば此ハ格別コトサあり御事よりて天穂日命天津
彦根命小ハ各御子孫有る物小多く所見たり此活
津彦根命熊野據樟日命小ハ御子等ハ更あり御齋の
氏この事絶て見えず又其を祭らる神社などの御事
の絶ても聞えざるを強て云ハ右の二神ハ此國小
天降来坐さる小依て其跡無き筈の事ありとも強て
云ハ云る可き物より猶右に云る如く天津と活津
と其義異あり神社啓蒙を引て決く同神ハ御在す可き御
事より通證樹下山門神系圖曰活津彦根命者近江

△大同類聚方十六
 日布里夜方比條の
 天壽寺小幾津津樂
 活津日子根命之神
 方和氣清之麻呂之
 上菱方と有し其
 同典を正すハ
 至りざれども若
 くハ赤坂郡石工
 布都之魂神社
 とい傳れり
 ういふ且彼國ハ
 長船と云ふ古
 由有り借又五
 十八卷鞆佐他業
 を元者天津日
 子根命之神方
 也とい有り若て

國彦根明神也と有れども彦根と云言ハ兩神子亘る
 稱ふれハ天津彦根命と申しても違ハざり可し何小
 在レ此式外あり一社を以てハ定め難き事共ふむ有けり且
 弟二一書ハ此神等の成出給ひ一物根を劔依り由
 ありハ他傳ハ三女神の事ハ為りハ何れも誤傳小
 ハ有れども打折為三段と有りハ其劔因て成坐
 ち男御子等も必五柱此ハ傳れども必三柱小御在レ坐ずてハ其物根ハ相
 合ハざりを思二可一此三女神を一柱と一玉依姫
 小御在レ坐一物根の説ハ弟二一書を正て見定ハ九
 ろハ天保十三寅年十一月の頃子て今よりハ十五年
 以前の事あり其頃思けりハ其一書ハ嚙断劔
 未而吹出氣噴之中化生神天穗日牟次正哉吾勝

速日天忍德耳尊次天津彦根命と有り次活津彦根命
 熊野櫛樟日命二神ハ天穗日牟次天津彦根命の名の重
 復れり有れハ例の如くあり諸其劔を此小も打折為
 三段と有ハ右の劔末より天穗日牟次の成坐ハ劔鋒
 を穂と云ハ天種日牟次其ハ因ハ名あり出雲國
 王記の火守社を神名式子焼大刀火守大穗日子命神
 社と有る例を證と為り足れり又其劔中より天
 穗耳尊の御劔ハ由無れども正哉吾勝と申すを以て
 其縁有べし劔頭ハ劔の根と云ハ天津彦根命の
 根是より神武天皇御紀ハ劔根命と申す例有れハ
 此三神ハ御名ハ皆其物根ハ因ハ御名と云可し
 思ひハ後世然る説ふを思高○熊野櫛樟日命弟二
 水くむ人ハ誠コ今六置くり
 一書此コ同く古事記ハ熊野久須毘命と作り弟
 一ハ一書ハ熊野忍踏命第三一書ハ熊野忍踏命亦
 名熊野忍踏命と見え下章第三一書ハ熊野大隅命

△郡家正東見
里一百二十步

と有り備此命を天穗日命の亦名と定め云由ハ紀記
共ニ天孫降臨章ニ見えたるガ如ク其命ハ一も其御
子武三熊之大人と共ニ大國主神を婿和シ鎮給ヒテ
御功殊ニ甚ドク御在シ坐テ神々々ニ出雲風土記ニ
意宇郡屋代郷△天乃夫比命御伴天降來神伊伎等之遠
祖天津日子命云々有り御名ハ出た北ノル其も
御事跡ニ就テ云々天津日子命ノ御事ニ因ニテ
云々其ハ正ニテ天穗日命ノ故事トハニ難ク此を
陰テ外ニ御名ヲ出タラハ其章ニ天穗日命比及三年
尚不報向云々武三熊之大人此亦順其父遂不報向ト

有ハ如ク久シク此國ニ止住給ヘラニ合セテハ甚似
氣無事共ニ其事ヲ不審トテ思フ正史
ニハ受張ル御名を以テ天穗日命ト傳ハル風土記
ニハ其御功を立給ヒ一時ニ御名を以テ傳ハル
云々其由ハ故思ハ由ハ同記ニ飯石郡飯石郷伊弉志
都幣命天降坐處故ニ伊弉志^{神龜三年}改字飯石^{有を内山真}
説^{イヒシテ}否鎮命ト申テ事ヲ天穗日命云々由云々然
ク言フ天孫降臨章經津主神武甕槌神ニ神ノ大已
貴神ニ向給ヘテ御言ニ汝意何如當須避^{不第}第二ニ書
ク汝將^下以此國奉^中天神^上以不^{イハ}ト云事見又神賀詞ニ

天穗比命^宇 同體見^尔 遣時^尔 云々然 毛鎮平^天 皇御孫
命^本 安国^止 平久^所 知坐^之 申^此 云々荒^留 神等^宇 撓
平氣^固 作之^{大神} 時^婿 婿鎮^此 有^又 合^止 其言^の 諾^ハ
云々云^の 又上^{二百四} 十六^下 云々如^く 風土^記 意^宇 郡條^ノ
野城驛^依 野城^{大神} 社坐^故 云野城^ト 有^ハ 此天穗日
命^日 御在^シ 坐^ハ 其地^ニ 社名^を 以^号 云々見^ル 此野
城大神^ト 申^ス 其亦^名 云御在^シ 坐^ハ 其^地 云々其章^第 二^一
書^ニ 勅^大 己貴神^曰 云々又當^立 汝^祭 祀者^天 穗日^命 是
也^ト 見^ス 神賀詞^ニ 是^ハ 親神^魯 伎神^魯 美命^宣 久汝^天
穗比命^汝 天皇命^能 于長^大 御世^宇 堅石^尔 常石^尔 伊波

波比奉伊賀志乃御世^尔 佐伎波南奉登仰賜志次乃隨
尔供齋仕奉^此 云々神乃禮自利臣^能 禮自登^御 禱乃神
宣^献 登^良 奏^ハ 有^云 云々就^テ 考^ル 云野城^ハ 祈^又 願^ト
同言^云 云々出雲大神^を 祈^奉 給^不 由^ハ 御名^ヲ 不^有 有^ハ
云々神^ハ 仕奉^ル 人^を 祈^宜 云云右^ニ 同^ト 又皇太神
大原野等^ハ 社^ニ 仕奉^ル 云々女^を 齋^母 云云如^く 天穗日
命^を 祈^宜 大神^ト 申^ス 云々如^く 天穗日
命^を 祈^宜 云云事^ハ 有^レ 後^ニ 能^義 祈^又 願^を 祈^宜
思^ハ 右^ノ 野^ハ 能^ハ 用^ヒ 云云祈^又 願^を 祈^宜
云云古事記^朝 倉^宮 殿^ニ 其^大 縣^立 懼^畏 稽^首 云
云故^献 能^美 之^御 幣^物 有^テ 誓^首 能^美 云云同言
云云尚^宣 鏡^南 始^章 傳^ハ 右^等 例^を 以^見 此^ハ 其^時
就^テ 其^言 義^を 云^云 云云右^等 例^を 以^見 此^ハ 其^時
二の御功^ハ 依^テ 負^坐 云御名^を 以^テ 彼^国 古^説 傳

△謂ゆら野城の

ハハハハハを風土記ハ其云ふ所ハ任ニ記サレタル者
あり故ニ此ト彼ト別神ト如ク見ユル物々々佗書
ニ引合ヒテ其説ハ渾圓スル方有テ知ラサル事右ニ
註ルカ如ク備此熊野檝樟日命ハ熊野ハ地名ナリ其
天穂日命ハ任給ヘリ△地名スル事天孫降臨章ニ就
テ傳トク寸可ク檝樟日ハ四神出生章ニ日神ハ御事ヲ吾
息雖モ未有若此靈異之兒ト御祖大神ハ詔給ヘリ大
御言見エ丹後風土記ハ天孫立テ伏レタル事ヲ仍怪
久志備坐故云久志備濱ト有リ又天孫降臨章ハ穂日
二上天浮橋ト云事有カモ思測スレバ事ヲ異ハ

云言あり古語拾遺ニ大宮賣神ハ御事ヲ是太玉命
久志備所生テ有ハ此ト如ク異ナル所由有テ思測ス
ズ御子ハ生給ルを云ト聞カレハ此ハ男御子一粒生
坐シテ其御誓ハ勝ルヲを續キテ生坐ス事ハ奇靈ウツシロト
カを以テ如此ク御名ニ負坐スルヲ穂日命ト申サリ
ハ以前ノ事ナリ生坐カクノ御名ナリト御在
坐ケル又上二百四十七ニ引ス馬見國神社祝詞ハ天穂日
命ヲ和御魂ト云テ天翔奇日乃嶽仁齋比奉利國乃真
保良止宗奉利云テ奇日乃嶽座天穂日命云ト見
元又奇日嶽神社正遷宮宣文ハ奇日仁称薛竟奉皇神

乃前仁白久云皇神乃乞汝之隨仁奇日乃嶺乃荒草
乃根荊掃比下津岩根仁宮柱太敷立天云云云云山
名也此神の鎮坐日因て負るふ此ハ實ハ天穗日命の
元名櫛樟日命又御在し坐ける事此を以て曉る可く
あむ有ゆる其ハ上より云る如く天津彦根命の亦名
又此奇び又生坐る所由を以て然御名又稱
奉水々をも思合す可し斯れハ天津彦根命と申すも
天津彦根命の亦名ある其即元名ふりけむ事此の
例ハ如くふり可し記傳七久須昆ハ久志須昆を約
たるふり其久志ハ奇靈より須昆ハ熊野大隅命とも
熊野大隅命とも有る隅又同ト云れ右ハ二合
世説れ下云ハ強高傳十三下ハ粗説ハ如く出雲
言より下云ハ風土記ハ出雲郡伊勢郡家西北八里七十二歩因引

坐意美豆努命御子赤衾伊努意保須美比古佐倭氣命
之社即坐郷中故云伊農神龜三年有之因引坐意美
豆努命ハ其卷首ハ所以號出雲者ハ東水臣津努命詔
ハ雲立語之故云ハ雲立出雲と有る據ハ素戔鳴等
因引坐し時日御名ふる由己ハ傳十五下ハ註云分
如く赤衾ハ伊努と云尅云て寢日係れり意保須美ハ
大隅より熊野大隅命と地名より續けらる此ハ其地
ありざる故又伊努大隅と續くるより比古佐倭氣ハ
男真別より伴劔より男神ハ三柱ハ別成坐る謂より
然るハ古事記ハ故其大年神聖神活須昆神之女伊怒

比賣生子云々次白日神次聖神と有る伊努ハ伊努の
誤り白向日誤る由己又記傳に註されたる實ニ然
る言きて此伊努比賣の父を神活須昆神と云ふ此
の熊野櫛樟日命の熊野と云地名を放ちて神活須昆
神と申せらるる活須昆ハ^{イナクスビ}殊奇異と云其意然^{イナクスビ}異
多々ぬを右の赤衾伊努意保須美比古佐侍氣命と打
合る實ニ奇^{イナクスビ}事なり又古事記に大年神^{イナクスビ}香用比
賣生子云々次御年神と有る同ト事ナ^{イナクスビ}重複^{イナクスビ}は云々
山城國乙訓郡向日神社記に向日神者大歲神^{イナクスビ}神^{イナクスビ}活須
日神之女神須治^{イナクスビ}暉姬命生子也と有るを以正し考る

右の伊努比賣香用比賣ハ一神なり向日神聖神ハ共
ニ御年神^{イナクスビ}向日ハ向飯なる可く聖ハ飯知る可
い水ハ外祖父天穗日命の御功を受継て國土之恩頼
を奉給ふ由ニ通^{イナクスビ}野櫛樟日命ハ同一神と云説^{イナクスビ}以
て約水^{イナクスビ}云々云々然水ハ大年神ハ天穗日命の
別なる御年神^{イナクスビ}坐る^{イナクスビ}其御^{イナクスビ}坐る^{イナクスビ}大年神^{イナクスビ}
御年神^{イナクスビ}稻穀を農作給ふ^{イナクスビ}備其天穗日命の后神^{イナクスビ}
神^{イナクスビ}坐中^{イナクスビ}齒契此^{イナクスビ}在^{イナクスビ}い^{イナクスビ}り^{イナクスビ}
了伊努比賣の御祖を求る^{イナクスビ}傳^{イナクスビ}十^{イナクスビ}五^{イナクスビ}十^{イナクスビ}又^{イナクスビ}云々
如く水門神速秋津日命^{イナクスビ}古事記^{イナクスビ}神身^{イナクスビ}見^{イナクスビ}え^{イナクスビ}た^{イナクスビ}
る伊豆能賣神^{イナクスビ}坐^{イナクスビ}御^{イナクスビ}在^{イナクスビ}坐^{イナクスビ}ける^{イナクスビ}出雲風土記^{イナクスビ}秋
鹿郡伊農郷郡家正西一十四里二百步出雲郡伊農郷

坐赤衾伊農意保須美比古佐和氣能命之后天甕津日
女命国巡行坐時至坐此處而詔伊農波夜詔故云伊努
神龜三年改字伊農と見えたる天甕津日女命是より神名式
出雲郡伊努神社同社神魂伊豆乃賣神社同社神魂神
社同社比古佐和氣神社と合せて四社有之其伊努神
社ハ赤衾伊努意保須美比古佐傳氣命の御父意美豆
努命と坐へ事右に引之風土記の文に依て曉る可
し次神魂伊豆乃賣神と神魂の言を冠て申せし神
魂命又屬奉る也給へる由は縁水とある可し次神魂
神社の御在し坐中事ハ上章第十一書に保食神

の状を見よ天熊人を被遣たる事を天照太神の御名
のに出たる也古事記大宜津比より故是神産巢日
御祖命令取茲成種と有か如く此は主^{神皇}産靈神の抱
ぶる也給へる所由傳十四百二に註るか如く天穗
日命伊豆能賣神二柱御妹妹と成給へる此時子在
て其も皇産靈神御命の依て取也給へる因て然ハ神魂伊豆
乃賣神と負給へるも可し又同記大國主神の鎮坐
る件に於出雲同之多藝志之小瀆造天之御舍而水戸
神之孫櫛八玉神為膳夫献天御饗と有る櫛八玉神ハ
倭姬命也記に出雲神子出雲建子命一名伊勢部彦神

一名櫛玉命と有ると同し神なり天穗日命の孫なるを水戸神之孫と有る其母方より傳へたる者あり此如
如此云て天穗日命の統脈の著明なる者なるを也此如
く此より攸つと轉つ其事の相結ハ此を以て予
ハ年頃考置たり一説ハ強ざるを思ふ可く此事は
ありハ記傳を始て諸家日有來れる説ハ一として
合ふ可き者非ざる事云ハ更なり其諸註とハ異なる所
不子ハ神の賜ハ水 備右ハ熊野忍踏命の忍ハ大なる
奇説なる者なり 事上 二百ニ 云ハ此ハ第三ノ書ハ熊野忍踏命を
下章第三ノ書ハ熊野大隅命と有るとも著明なる事
なり 踏ハ踏なり 天孫降臨 章第五ノ書ハ吾田鹿章津姫益恨
作無戸室入居其内誓之曰吾所娠若水天神之胤者必

亡是若天神之胤者無所害則放火焚室其大明時踏踏
出見云々云と踏踏云々事四所有は是なり其ハ最初
ハ男御子の生坐る時ハ素戔鳴尊の正哉吾勝と宣給
へる故ハ御名を勝連日と負奉れるが如く其次ハ生
坐る此御子の踏踏ハ名乘出給ふ可くめれば忍踏と
ハ御名ハ負給ふ可き御事ハふむ有ゆる又熊野大隅
命と申す大隅ハ大進なる可く上 二百ニ 註云ハ如く
三女神の中ハ田心姫ハ踏踏ハ美なる又三女神を合
せハ須勢毘賣命と申し進姫命の意なるを准くと思
ハハ其大隅ハ大進なるむ事ハ知られむハ神名式

出雲國意宇郡志保美神社 風土記より、其保神社と
其御誓言の由有る事上百十、熊野坐神社名神大素戔嗚大神、神在坐るを神
祇令義解、天神者云出雲國造齋神等類是也、地祇
者云出雲大女神等類是也、有る如く、水が國造
の立仕奉れり、熊野大社、方ふりけり、風土記
天平五年、勅遣せり書、國造帶意宇郡大領
外正六位上、勲業出雲臣廣島、有れ、其項、下り、猶
意宇郡、任、熊野大社、仕奉り、其地、より、持筑大
社、の祭、を、成、したる、より、然れ、天德日命、より、次
其地、に、任、來、れ、り、故、に、神名、より、熊野、に、冠、り、世、奉
水、の、者、子、〇、凡、五、男、矣、凡、氏、五、柱、能、比、古、神、坐、須、と、訓
來、れ、り、日、從、ふ、可、く、備、此、五、男、の、御、事、ら、り、古、書、記、に
と、其、終、に、拜、五、柱、と、有、り、下、に、此、の、如、く、天照太御神告
速須佐之男命、是、後、所、生、五、柱、男子、者、物、實、因、我、物、所、成

故自吾子也と有り又第一二書の終より凡五男神矣
と見え第二二書より凡五男神云々と有り五柱の數
相違はざるなり然るに第三二書より其外二燧之速
日命一柱加はれり故に便取其六男以為日神之子と
見え第三二書と其と同く有り凡六男矣と有り五
男と六男との異説古より有來れりを予又上の説に
如く然るも可き証共の有りを論じ完めて實より凡世
て三男の御在坐と定めたる説あり神祇本紀より
吹棄氣吹、扶霧之中、化生、六男之神、云々と有り、其終、天照太神
勅曰云、故、化生、六男之神、是、吾、兒、乃、取、而、子、養、と、有、り
此、作、者、識、見、無、し、故、に、數、の、多、き、を、本、説、より、眞、古、傳
と、可、し、と、思、取、れ、る、な、り、可、け、れ、ば、更、に、云、ふ、り、足、り

然云由ハ上ニ委シク註ルガ如ク活津彦根命ハ天津彦根命ノ亦名ナリ熊野櫛樟命ハ天穗日命ノ亦名ナリを別神ノ如ク心得テ古人ノ已ク五男子トハ成セ
ル者ナリ且其燬之速日命ト申サハ上章第六一書ニ
以燬速日神ト申サ有テ已ニ傳十百五ニ且ト云ヲを
其説ハ傳十八三十一ト定メ云ベシ此を以陰ク時ハ此
ノ五男六男ノ異説も有レども其歸ル所天穗日尊
天穗日命天津彦根命三柱御在シ坐下メシナリ然云
時ハ此ニ古事記ニ天照太神ノ物根ノ事を宣ヒ
ける御言ニ故彼五男神悉是吾兒ト仰給ハ少シト徒

事ノ如ク成レテ状ニテ甚々容易ク申シ言ニテ可畏
クハ有レども日神ノ其時ノ大御言ハ三男神ト
三男子ト宣ヘリゆむを後世ニ亦各ノ混ルレ別
一神ノ如ク成テ傳ハレテ故ニ其を合セテ數ムレハ
現ニ五男神ナリ又然五男ト見ユル上ハ假令大御命
ニハ三男ト傳ハルニ其真數ニ叶フテ五男トハ記
スル可キ事答事ナリ強テ拘ルル可キ事非ズヤ第三
一書ハ故日神云、便取其六男以為日神之子使詔
天原ト有レども後より合セテ六男トハ云レハ者
ふるを以備古ノ事五男三女ト傳ハリト天下ノ人
異義を成ス事ナリト三女を一神トシ



五男を三神と定云ふ如きは甚く強たる事如くは
 有れは其混れを正して其事の詳明なる上ハ然
 云ふ事を得ぶる事其然誤る事見えて着明
 きを記さくらむ此神紀の傳し奉る我身又取てハ
 却日其罪少所無猶云ハ上日註せる如く謂カ
 心より為れハ多ク
 叙玉の御誓ハしり第二一書實正し其真傳と見え
 て諸書より合る素戔嗚尊乃天照太神の御叙を賜
 して三男神等を生坐ると為る時ハ此又天照太神乃
 素取素戔嗚尊十握叙打折為三段と有り古事記にも
 天照太神先乞度建速須佐之男命所佩十奉叙打折
 三段而云々と有るは此男神子等の物根とを混
 れて三女神の御事と成りし者なり此三段は打

